

朝鮮における「近代児童文学」の始まり：朝鮮児童文学と巖谷小波 その一

金, 成妍

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程一年

<https://doi.org/10.15017/8462>

出版情報：九大日文. 4, pp.53-90, 2004-04-30. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：



朝鮮における

「近代児童文学」の始まり

——朝鮮児童文学と巖谷小波 その一——

金成妍
KIM SUNG-YOUNG

はじめに

近代社会の黎明以前には「児童」という概念が存在しなかった。フィリップ・アリエスがヨーロッパにおける「子ども期」の出現を、資本主義社会が形成される十七世紀の半ばと定め、近代的家族制度の成立と軌を同じくしていると指摘したように、そして、それまで「大人」に対応する「小さな大人」でしかなかった存在が、新たに「可愛がられ」「保護される」対象として解釈し直されるようになったと指摘したように、「児童」という概念は近代社会の成立過程と密接に結びつく形で派生するのである。朝鮮でこのような「児童」に対する認識が形成され、児童解放とともに児童文学が主唱されるようになったのは、一九二〇年以降のことである。日韓併合前後から流れてきた少年運動の命脈のなかで、少年から分離された「児童」が、朝鮮で産声をあげたのである。

朝鮮に起こった少年運動の動きは、日本統治下に置かれた植

民地期に行なわれたという歴史的な背景を必然的な問題として抱えていた。そこで、朝鮮における児童文学の定着経緯をたどるために、朝鮮の内側と外側の動きを総合的に考察していきたい。朝鮮内部の「児童解放」の動きだけでなく、また、日本側からの「児童教化」の動きだけでもなく、その二つの関係性の中から朝鮮児童文学は定着したと考えられるからである。

「児童解放」を叫ぶ朝鮮に対して、日本はいかなる対応策を導入したのか。児童文学における日韓の関係性とはいかなるものなのか。本稿では、朝鮮内部の動きに対して日本側がどのように関わっていったのかを、朝鮮で行なった巖谷小波の児童文化活動を通して論じていきたい。巖谷小波以外にも、沖野岩三郎、北原白秋、野口雨情、渋澤青花、久留島武彦などの日本児童文学界に多大な影響力をもっていた著名人が朝鮮を訪問していた。にもかかわらず巖谷小波に着目する理由は、総督府所属の官公立機関の組織的、また積極的な支援関係によって、二〇日間という短期間でありながら六〇回もの口演が企画され、六万人以上の聴衆が動員されたという、他に類を見ない小波口演の特性が、日本側の動向を端的に示していると考えられるからである。

現在、管見によれば、植民地期に日本人が朝鮮で行なった児童文化活動に関する研究は皆無と言える。しかし、日韓児童文学の関係性に注目した先行研究は少ないとはいえ、一九六〇年以後なされてきた。以下、日韓児童文学の関係性を論じた韓国の先行研究を概観しておきたい。

先行研究の検討と問題提起

日韓児童文学の関係性について論じた論文の初出は、一九六二年一月の『児童文学』第二輯に載せられた尹鼓鐘の「児童雑誌小史」である。尹鼓鐘は、崔南善の『少年』を「我が国の児童雑誌の嚆矢」と評価し、「一九〇八年に崔南善は、日本留学時代に東京で見た日本博文館の『少年世界』という雑誌が日本の子どもに多大な影響を与えているのを見て『少年』を発刊した。」と述べている。また『オリニ』についても、「初印象としては、当時日本で出版されていた講談社の『少年倶楽部』及び、実業之日本社の『日本少年』と似たような編集体制をもっていた雑誌であった。」²と述べ、初期における朝鮮の児童雑誌が日本の児童雑誌の影響を受けたことを示している。一九六九年に趙豊衍は、『逸呷(松明)』二月号で、「韓国の児童文学が胎動期以来一番影響を多く受けた日本児童文学界の流れをとっても安易な方法によつてたどつてみた。」³という書き出しで始まる「児童文学の韓・日関係」を載せている。同稿には、日本の七五調を韓国で導入したことで、巖谷小波と方定煥の「二人の小波」が、同時代に一人は日本で、もう一人は韓国で活動したことが簡略に述べられている。趙豊衍は、「方定煥が巖谷小波の影響を受けたということは軽率に口にあげられないが」⁴というように控え目な口調ながらも、「時代的に巖谷小波は、少年期を脱し青年期にあつた方定煥が東京に留学していた時

に、そこで全盛を成した大家の境地にいたのである。」⁵と述べ、方定煥が日本留学時代に巖谷小波の影響を受けた可能性を暗示しながら文章を収めている。

一九六〇年代に入つてからは、『児童文学』や『逸呷(松明)』のような児童文学批評専門誌が登場するなど、韓国では児童文学に関する研究が盛んになる。しかし、韓相寿(韓国児童文学の教育的機能研究)檀国大学、一九八八年)や崔志勲(韓国現代児童文学論)児童文学社、一九九一年)、コン・ボクヨン(忠阜忠) (近代児童文学形成過程研究)延世大学校、一九九九年)らが指摘しているように、「批評の不在」に陥つた児童文学の研究領域は、李在徹による「一人研究時代」の状態がしばらく続いた。

李在徹は、『児童文学概論』(文運堂、一九六七年)を皮切りに、『児童文学の理解』(志社、一九七七年)、『韓国現代児童文学史』(志社、一九七八年)、『改稿版児童文学概論』(文運堂、一九八三年)、『児童文学の理論』(螢雪出版、一九八三年)、『韓国児童文学作家論』(開文社、一九八三年)、『韓国児童文学研究』(開文社、一九八三年)、『韓国児童文学作家作品論』(端文堂、一九九一年)などを出版、一九七六年からは『児童文学評論』を刊行している。日韓児童文学の関係性に関連した李在徹の研究には、一九九〇年、『韓国児童文学研究』の創刊号に出した「韓日児童文学の比較研究(一)」がある。「韓日間の児童文学に関する比較研究は皆無ともいえる今日の現実」と指摘する李在徹は、日本の児童雑誌の分析を通して、韓国の児童文学作家たちが日本留学時期に受けた影響とその当時の日本児童文学雑誌に表われた韓国観

について論じている。一九〇〇年代から一九四〇年代までの日本児童雑誌を概観しているこの論文で、李在徹が特に注目している点は、崔南善や方定煥の「日本留学」のことである。先ず、彼は一九〇〇年代について次のように論じている。

「この時期の文学分野で最も注目すべきことの一つは、近代文学初期の重要な文人であった崔南善の日本留学がこの時期にあったということである。」¹⁷

さらに氏は、「この当時の崔南善は日本で何を学んで来たかという問題」を取り上げている。また、一九二〇年については、「この時期の韓日児童文学の關係史において最も重要な事件の一つは、方定煥の留学と『オリニ』誌の創刊である。」と評している。日本留学を通して方定煥が巖谷小波の影響を強く受けたということ疑わなかった李在徹は、「方定煥が巖谷小波から受けた影響は、彼が自分の号を巖谷小波のそれを真似て付けた事実一つとっても十分立証される程大きかったと考えられる。」と断定している。また、日本の児童雑誌『少年世界』が日韓併合に対してどのような態度を保ったかを、巖谷小波の文章をもって論じている。「国を失った韓国の子どもたちに日本児童文学の第一人者（巖谷小波のこと―筆者注）は日本語を学ぶことを強要し、日本の児童文学を通してこそ幸せになれるという独断を堂々と披瀝している。」¹⁸と述べている。結論としては、「韓国の多くの児童文学者に大きな影響を及ぼした、日本児童文学者である巖谷小波の韓国観及び彼の児童文学観から端的に分かるように、日本の児童文学は韓国児童文学に否定的な影響

を及ぼしたという点は看過できない。」と論じている。

以上のように、現在まで韓国の児童文学における巖谷小波は、「日本に渡って児童文学を研究した六堂や小波（方定煥のこと―筆者注）に重要な影響を及ぼした人物」¹⁹として理解されてきた。しかし、それはあくまでも巖谷小波を日本側の人物とみて、彼と韓国児童文学の影響関係を論じたものである。日本への留学生が、日本で彼を学んだことの一点にのみ視点を置いているものがほとんどであった。また、その「影響」の内実も詳らかに はされていない。安京植の『小波方定煥の児童教育運動と思想』（学志社、一九九九年）においても、方定煥の日本留学²⁰は、日本児童文学の「受容」の入口としての意味合いで述べられてはいるが、具体的な検討はいまだ不十分である。²¹

日本帝国の支配下におかれていた当時の朝鮮の状況を考慮に入れると、児童文学の成立過程については、必然的に多角的な視点が要求される。先行研究においては、日本の要素は二項対立的に「否定」的影響として結論づけられてきた。それに対して本稿では、朝鮮児童文学が日本と朝鮮との複雑な関係の中で定着していったのではないかという見解をもって論を進めたい。先行研究において主に論じられてきたように、朝鮮人留学生が果たした役割と彼らがつもつ意味が大きいのは言うまでもない。しかし、朝鮮から日本へ渡った留学生による一方的な活動だけでなく、朝鮮に渡ってきた日本人による活動についても共に考察しなければならない。

そこで注目すべき論文の一つに、大竹聖美の『近代韓日児童

文化教育関係史研究』(二〇〇二年)があげられる。この論文において大竹聖美は、今まで「日本人が行なった植民地教育・児童文学文化に関する論文はなかった」¹³ことを指摘し、その原因として「児童文化領域は第一に研究資料の保存状態が劣悪で、整理された資料がなかった」ことを挙げている。一八九五年から一九四五年までを研究範囲として、朝鮮で行なわれた日本人の活動、そして渡日韓国人の活動などを論じている同稿には、巖谷小波の朝鮮訪問についても触れられている¹⁴。しかし、巖谷小波の朝鮮口演について触れているというものの、それは小波の自伝『我が五十年』を引用して一九一三年の朝鮮口演を紹介し、『桃太郎主義の教育』から小波の朝鮮観を簡略に説明する程度にとどまっている¹⁵。いつ、どこで、誰を相手に口演を行なったのか、何の目的で企画され、どういうことを「聞かせた」のか、また口演の他、小波はどういう活動を朝鮮で行なったのか、何一つ明らかになっていない。

巖谷小波が口演旅行で朝鮮を訪問したのは、一九一三年一月、一九二三年七月、一九三〇年五月、同年一二月の全四回であった。この中で本稿では、一九一三年と一九二三年の口演活動を中心に論じていきたい。その理由は、一九一三年と一九二三年という時期のもつ特殊性にある。

日韓併合を記念する『少年世界』誌上において、小波は「従来韓国の小国民と呼ばれた、朝鮮の少年諸君」に向かつて、「僕等わ飽くまでも諸君と共に、新空気を吸い、新知識を蓄え、新日本の未来の為に、ます々福利を謀ろうと思う。それにわ第

一に、相互の意思の疎通を要する。意思の疎通を謀るために、言語と文学の画一を要する」¹⁶と唱えていた。そして一九一三年に至って、直接朝鮮半島に足を運び、口演童話を試みた。小波の初口演が行なわれた一九一三年、朝鮮には「児童雑誌の嚆矢」といわれる『赤い上着』や「子どもの読み物」、『セツピヨル』という雑誌が崔南善によつて相次いで創刊されていた。すなわち、児童文学が芽生え始めた時期に、小波の初口演も実現したのである。この口演について小波は、言語問題においては別に差支えなく「成功」を収めたが、「折角話をしてもしも反響がなかった」¹⁷という印象を述べている。

それから一〇年が経った一九二三年の六月、小波は本格的な口演旅行を掲げて再び朝鮮半島に渡った。一九二三年の朝鮮は、「児童解放論」が主張されており、少年会の全国的な拡散、「子どもの日」の全国規模の記念行事、朝鮮初の本格的な児童雑誌『オリニ』の誕生など、児童文化活動の興隆期を迎えていた。

一九二三年という時点は、朝鮮に対する日本政府の政策面においても大きな特徴がみられる。当時総督府の施政方針は、「総督政治の基本を純然たる文治主義と為すの方針を明かにし大に文化的開発に力を盡したる」¹⁸という、いわゆる「文化政治」が標榜されていた。総督府の御用紙として、「文化政治」の一環となる「政治宣伝」にも多く利用されていた『京城日報』と『毎日申報』の共同主催で、小波の「全鮮巡回お伽講演会」が企画されたことは注目すべきである。この企画には、講演会の宣伝や講演日程報道の他、先発隊となつた「童話普及会」の幹

事が前もって講演の予定地を回るなど、徹底的な事前準備が行なわれていた。またお伽講演会の他、木太刀社と南柯社の後援で、「小波先生歓迎俳句・俳画大会」も開催された。

それに加えてもう一つ、朝鮮における小波の活動が、童話を「聞かせた」口演活動にとどまらず、新聞に「創作」童話を発表することにつながったことも興味深い出来事である。口演が行われた四ヶ月後の一九二三年一月二十五日付『毎日申報』には、「日曜附録婦人と家庭」欄が設けられ童話が掲載されることになる。この欄に初めて登場する童話が、小波の「白蛇が出かけた後」であった。そこには、「この童話は東洋の童話王として名高い日本の巖谷小波先生が特別に毎日申報のために新しく作つてくださったものです。」という編集者の言葉が添えられていた。それから始まった小波の童話は、『毎日申報』に四ヶ月間にわたって一五回連載され、全一篇の童話が紹介された。

二〇日間で朝鮮半島の二〇カ所を巡回し、六〇回に及ぶ口演童話を通して、小波はどういうものを朝鮮の人々に「聞かせた」のか。またどういふ童話を朝鮮側に「読ませる」こととなり、そこには何がどう書かれていたのか。

このように朝鮮内部で起こっていた「児童文学」への動きをたどるとともに、朝鮮で行なわれた小波の足跡を追っていく作業によつて、朝鮮児童文学の成立過程における日本側の動向が見えてくると考えられる。また、そもそも朝鮮児童文学にとつて、巖谷小波による口演及び童話執筆活動とはいかなるもので

あつたのかを問ひかけ、朝鮮児童文学の成立期における巖谷小波の位置づけを試みる。さらに、巖谷小波を媒体として考えられる児童文学における日韓関係について考察し、その新たな可能性を提示することを本稿の最終的な目的とする。

用語の説明

(一) 歴史的・思想的コンテクストが曖昧なることを回避するために、原則として日本統治期の半島を表す表記に、朝鮮を使用することにした。(一八九七年から一九一〇年までは大韓帝国を略して韓国と表記する。)

(二) 巖谷小波と方定煥は別人であるが、彼らの筆名は共に「小波」である。そこで、二人を区分するために、方定煥を指す「小波」にはカッコ付で韓国式読みの(ソパ)というルビを付すことにした。

(三) 昔話や児童文学の作品を子どもたちに話して聞かせる方法を口演童話(ストーリー・テリング)という。明治期から大正期までは「お伽噺の講演」または「お伽講演」などと記されていた。小波の口演を報道した朝鮮の新聞では、「お伽講演」「講話」と記述している。本稿でもこれに従い、資料や証言などに用いられた表記をそのまま採用することにしたが、基本的に「口演童話」を意味する。

第一章 朝鮮における少年運動と「近代児童文学」の始まり

鎖国的な状態にあった朝鮮が外部に開かれていく経緯をたどるのは、一八六〇年代、いわゆる「開化期」²⁰を通してのことである。朝鮮に初めて登場した近代的な新聞は、一八八三年一〇月三十一日に創刊された『漢城旬報』であった。一八八一年一月一日から『朝鮮新報』という新聞が発刊されていたが、それは釜山港商法会議から大石徳夫という日本人によって創刊された日本語新聞であった。それから、「最初の近代的総合教育誌であり児童雑誌の嚆矢」²¹と評価される『少年』が創刊されるのは、一九〇八年一月に至ったことである。『少年』が創刊される一九〇八年一月まで、朝鮮では五四種の雑誌が創刊され、また廃刊になった。この中で児童向けに創刊された雑誌は見当たらないが、タイトルに「少年」が付くことから『少年韓半島』²²が目をはく。

『少年韓半島』は、一九〇六年一月に梁在審、趙兼応、李仁植、李海朝によって創刊され、一九〇七年四月に通巻六号で廃刊となった。『少年韓半島』について李在徹は、「これは新学問を紹介した児童教育誌であり、やはり最初の児童誌は新文学の起源を成した『少年』誌である」²³と述べる。コン・ボクヨンも前掲の論文で、『少年韓半島』は知識伝達をその主な目的とした点から開化期の教科書と変わりがないものと述べる。

『少年韓半島』に載っている広告欄には、『小物理学』『大東歴史』『初等小学』といった教科用図書が扱われているが、こ

れは同誌が同流の教育誌であったことを裏付けている。

一 崔南善の雑誌活動を中心に（一九一〇年代）

『少年』は一九〇八年一月一日、崔南善によって新文館から創刊された。『少年』を主幹した崔南善の経歴について簡単にまとめると次のとおりである。彼は、一八九〇年四月二六日、漢城中部上梨洞で父崔猷圭・母姜氏の次男として生まれた。観象監・学部・学務局長の官職にあった父崔猷圭は、唐草材の貿易にまで手を広げ、崔南善はかなり裕福な環境で育った。児号は昌興、字は公六、号は六堂・六堂学人・ハンセム（韓馨・南嶽主人・曲橋人・逐閑生・大夢・白雲香徒であった。一九〇二年、一三歳で京城学堂に入学、わずか三ヶ月間日本語を勉強しただけで大阪朝日新聞を購読したという。崔南善は全二回にわたって日本留学を経験しているが、第一次留学は一五歳の時であった。一九〇四年一〇月、皇室留学生に選ばれて東京府立第一中学校に入学するが、三ヶ月後の翌一九〇五年一月に退学して帰国する。それから一九〇六年三月に、早稲田大学高師部地理歴史科に入学するために再び渡日する。しかし、またしても長くは続かず、六月に起こった模範国会事件²⁴で早稲田大学を退学してしまう。日本留学は一年にも満たない短期間のものであったが、崔南善に少なからぬ刺激を与えたとみられる。

崔南善は、『少年』第三年第六巻の「少年時言」において、

十五の秋に日本に渡つてみたらその出版界が我が国より大きいことには驚いた。定期刊行物・臨時刊行物を問わず見たこともないものばかりで、またその内容や外観に対して少しも批評する知見を持たない自分の目には、ただ多大な大言で言う、ものすごいという感想しかなかった。²⁵

と、「日露戦争の初期、日本新文明が正に過渡期に置かれた時に、急転直下の勢いで向上進歩する実績を目の前にした所、見えるもの聞こえるもの全てが非常に神経を刺激した」ことを述べている。日本の新文明に直面した時、「祖国へ帰ろう！祖国へ帰ろう！」という声が常に耳の鼓膜を打ったという。その刺激によつて、崔南善は、自身の「十年宿病の新報雑誌に対する狂気」に火をつけることになる。早稲田大学を退学した後、東京の秀英社から印刷機械を購入、組版・植字・印刷の日本人印刷技術者五名を連れて一九〇六年の冬、ソウルに帰つてきたのである。日本からの印刷設備と技術者をもつて、一九〇七年に新文館を創設、翌年の一月に『少年』を創刊した。一九〇八年一月一日に創刊され一九一一年五月第四年第二巻で終刊した『少年』誌は、通巻二三号を刊行した総合雑誌である。²⁶主に崔南善一人の執筆によつて出来たが、李光洙、洪命熹が時々参加している。

崔南善は、『少年』創刊号の「編輯室通奇」欄において、「長い間我々が経緯してきた、少年のための雑誌になるかどうか、恐る恐るやってみるつもりで新文館からこの雑誌を発行した」

と、「少年のための雑誌」への意志を表明している。『少年』創刊号を概観すると、その表紙には次のように明記されている。

今我が帝国は我が少年の智力を資して、我が国の歴史に大光彩を添え、世界文化に大貢献を為さんがため、その任は重くその責は大である。本誌は此責任を克当し得る活動的進取的発明的な大国民を養成する為に出来た明星である。²⁷

ページをめくると、目次の前に「我が大韓を少年の国にせよ。そのためには、この責任を充分に成し遂げるべく彼らを教導せよ」²⁸という創刊の趣旨が記されている。この趣旨は、毎巻雑誌の冒頭に掲載されている。つまり、「活動的進取的発明的な大国民」になる少年を養成するために、『少年』を創刊したと主張しているのである。

『少年』が創刊された時期の韓国社会に目を向けると、「教育救国思想」を唱える愛国啓蒙運動が国権回復運動の大きな潮流であった。一九〇四年八月の第一次日韓協約で財政及び外交の顧問政治が開始された。引続き、一九〇五年一月の第二次日韓協約が結ばれた翌年二月、日本の統監府が漢城に設置され、伊藤博文による統監政治がはじまる。『少年』創刊の一年前である一九〇七年七月には、第三次日韓協約によつて韓国政府各部の次官にすべて日本人を配置する次官政治が始まっていた。急激に植民地化されていく状況のなかで、朝鮮人は各方面で国権回復運動を展開していた。代表的な大衆運動である反日義兵

運動は、一九〇八年には戦闘回数が一、四五一回、参加した義兵数が六九、八三二名に上り、義兵運動は最高潮に達していた。

「反日義兵運動とともに、言論と教育を通して国民の愛国精神を自覚させ、また、日本の資本侵略に対抗できるように殖産を育成させるべく愛国啓蒙運動が起こっていた。「教育救国思想」は、このような愛国啓蒙運動の中心となつて、「若い青少年たちを儒教教育から解放して、理科を教え、数学を教え、体を鍛えて、かれらを将来の朝鮮の担い手に養成しなくてはいけない」という「少年運動」として発現した。「活動的進取的発明的な大国民」になる少年を養成し、「我が大韓を少年の国にせよ」と唱えていた崔南善の主唱は、朝鮮に芽生えていた少年愛護思想を固く支持し、少年運動の基本精神を明確に形づけることとなつたのである。

『少年』についての先行研究では、それを「近代雑誌の嚆矢」でありながら「児童雑誌の嚆矢」として位置付けている。李在徹は、『韓日児童文学の比較研究（一）』において、『少年』のモデルとなつたのは、当時博文館で発行していた巖谷小波主筆の『少年世界』だったことを主張している。また、大竹聖美（近代韓日児童文化教育関係史研究、二〇〇二年）もこの主張を繰り返して述べ、「児童文学雑誌」として『少年』を論じている。崔南善が日本留学中、主に勉強した場所が博文館所有の大橋図書館であり、その博文館が膨大な量の児童図書を出版していたことを根拠にして、崔南善が『少年世界』をモデルとして『少年』を創刊したと論じている。

洪一植の『六堂研究』には、

ちようど五十年前を回想しながら、彼（崔南善のこと）筆者注）はその時の実情を自らも強く感じるようである。筆者に次のように語つた。（中略）日本に暫くいた時、日本には児童を対象とする雑誌が数種あつて、あれをまねしてやつてみようと思つて始めた。しかし、日本とは事情が違つて児童を対象とする面白い興味本位の記事はあまり掲載せず、しまいにはむしろタイトル『少年』とは反対に成人を対象とする一般啓蒙誌になつてしまつた。当時の事情からは仕方がないことだつた。³⁰

という崔南善の言葉が記されている。崔南善は、最初日本の児童雑誌のようなものを目指して発刊を始めたが、結局は「成人を対象とする一般啓蒙誌」になつてしまつた事情を語っている。しかし、そのような動機があつたとしても、『少年』の「児童文学」誌たりうる要素については、崔南善が『少年』に掲載した文章や、雑誌の内容分析による検証が伴わなければならない。そのため、『少年』に所収された作品の内容目録を精査する。次は創刊号の目次である。

少年十一月曆

海から少年へ（詩）

少年時言

巨人国漂流記

少年読本

ピョウトル大帝伝

カラスの空望

黒駆子遊び

甲童伊と乙男伊の相従

公六の愛誦詩

イソップ物語

海上大韓史

海というのはこういうものだよ

秋の意味

少年漢文教室

ロシアはどんな国か

少年訓

星辰

鳳吉伊地理工夫

薩水戦記

快少年世界周遊時報

少年文壇

少年通信少年応答

編輯室通奇

『少年』創刊号には「日本に御遊学中の我皇太子殿下と太師伊藤博文公」、「ナイアガラ瀑布」、「ピョートル大帝」の写真三枚が載っている。

「イソップ物語」、「巨人国漂流記」、「少年史伝―ピョートル大帝伝」は、「少年文芸物」ともいえるものであるが、雑誌全体は知識伝達を目的とする教育的な内容で構成されている。崔南善は「編輯室通奇」を通して、次のような考え方を示している。

本誌は、あくまでも我が少年が剛健で堅確で窮通な人物になることを願い、決して軟弱懶惰依恃処偽の心を刺激するような作品は載せないようにするつもりです。しかし美的思想と心神に有助するものなら軽軟なものでも少しずつ掲載致します。軽軟なものを主張して児童の好奇心と歓意に

迎合し、様々な懸賞と抽籤を行なつて白紙のような児心に虚欲と僥倖心を印刻することは、外国雑誌の通弊です。これは我が同人が外国に滞在している時に深く恨嘆し、奨励上、不得不為以外は一切懸賞は致しません³⁾。

ここで崔南善が「外国雑誌の通弊」として挙げている「軽軟なもの」を主張して児童の好奇心と歓意に迎合「するものこそ、彼が日本の児童雑誌を通して接した「児童文学」だったと考えられる。「剛健で堅確で窮通な人物」を理想の少年像としていた崔南善にとつては、そのような「軽軟なもの」は、相容れないものであった。

崔南善は「少年時言」において「立志思想」を唱え、「海上大韓史」を通して少年の「海上冒険心」を強調する。「甲童伊と乙男伊の相従」には、甲童と乙男という、自分が理想とする少年二人を登場させている。一五歳の甲童と九歳の乙男は、いつも万物の理知について思考・探究し、「有益な会話と有助な遊び」のみを好む仲良しである。この話は、甲童と乙男の間答式で構成され、甲童が質問を投げかけた後終わる構成となっている。文末には、「乙男のような子どもに解けないものはないはず、きつと有理な答えをするだろうが、この面白くて有助な理致を知るためにはいくらなんでも来月まで待たなければなりません」という崔南善の言葉が付されており、連載を計画したものとみられるが、その続きは一年後の第二年第一〇巻（通巻一二巻）に掲載される。「鳳吉伊地理工夫」は、「鳳吉ちゃんの

地理勉強」という意味のコラムで、朝鮮半島を兎に例えた日本の地理学者、小藤文太郎博士の説を批判、「これは崔南善の按出なのだが、我が大韓半島をもつて猛虎が足をあげてうなりながら東亜大陸に向つて飛ぶが如く、跳ねるが如く、生気いつばいかみつき飛びかかる様子をみせたものだ」と述べ、兎と虎に例えた朝鮮半島の図を掲載している。

「イソップ物語」を掲載するにあたっては、この物語が世界各国の小学教育書に多く引用されていることを強調、「毎巻四・五節ずつ訳して、最後には有名な内外教育家の解説を付けておくので、易しい話のなかに深くて難しい理致があることを悟り、処身行動に有助することを願う。」という言葉を前提としている。また『少年』には「少年文壇」欄も設けられているが、それについては「編輯室通奇」において次のように記している。

この紙上には少年諸子の文芸を奨励するために、『少年文壇』を設置しました。つきましては感想や諸経歴などを真実に簡明に、規定にある通り書いてお送りくださいますと、優秀な作品を選んで掲載致します。また、次回からは『少年通信』『少年応酬』等の欄を設置するので、前者には皆さんが住んでいる地域の名勝・故蹟・人物・特殊な風習・方言・童謡・伝説等を明記して寄稿してくださいれば掲載致します。時としては謝礼を差し上げることあります。³²

崔南善は「少年文壇」に、「童謡」というジャンル名を使用

し、募集していた。しかし、「少年通信」に寄せられた「童謡」の内容をみると、言葉遊び（尻取り）のような歌³³と古くから伝わる民謡風の歌³⁴で、今の「童謡」とはかなり距離があるものである。

「少年諸子の文芸を奨励するために」と、「少年文壇」を設置する意欲をみせたが、創刊当時崔南善が読者投稿に期待を寄せた「少年文壇」は、活性化することなく第二巻第四巻（通巻六号）をもつて終わりを告げる。

『少年』に掲載された「少年文芸物」は、イソップ物語が第一年第一巻と第二年第一〇巻に二回、巨人国漂流記が第一年第一巻から第二年第八巻まで八回、ロビンソン無人島漂流記が第二年第二巻から六回、その他「少年史伝」としてピョートル大帝、ナポレオン大帝伝が連載された。そして『少年』には「童話」というジャンル名が一回だけ登場しているが、第二年第五巻（通巻七号）の「花に関する童話」がそれである。第二年第五巻は、「花」特集で構成されており、「花学教室」が設けられ、各種花に関する一般常識が多様に綴られている。この企画の一環として「花に関する童話」を紹介しているのである。「ハウソン原作」と記されたこの童話は、「どうして一年間花が咲かないでしょうか」という題名である。崔南善も、「我が国の作品は数少なく、その代わり翻訳物でアンデルセンの童話のようなものが紹介された」と語っているように、『少年』には海外の作品を翻訳・翻案したものがほとんどであった。

創刊号には、上述のような「少年文芸物」も掲載していたが、

巻を重ねるたびに「少年文芸物」なるものは姿を消していく。第二年第八巻（通巻一〇号）からは、青年学友会の事業報告や関連記事、そして論説中心の記事が多くなるのである。また、第三年第一巻は「リンカーン百年記念号」、第三年第九巻は「トルストイ先生下世記念号」、そして最終号の第四年第二巻は「陽明学」及び「陽明先生王守仁」を中心に構成されている。

同誌の執筆にも参加した李光洙は『少年』に対して、

彼はもはや「新文館」という印刷所を創設して『少年』という月刊雑誌を発行していた。年は自分より二歳だけしか多くなかったが、我が国の名士となっていた。しかも島山安昌浩との縁で彼は青年学友会の幹部であつて、彼の雑誌『少年』はその準機関紙であつた。（中略）彼の少年雑誌は、決して少年を相手としたものではない、一般文化雑誌といえるものであつた。³⁶

と述べている。雑誌の内容が青年学友会の機関紙とされるようになっていたが、『少年』は決して青年学友会の機関紙ではなかつた。

国権回復運動の真つ最中に日本に留学して新文明を体験した崔南善は、なかでも日本には児童を対象とする雑誌が数種あるのを見て、帰国した後「少年のための雑誌」を試みた。未来の担い手となる少年を指導するために、彼らの自覚を促す意味において「少年のための雑誌」の発刊に着手したのである。

崔南善が、「日本とは事情が違つて児童を対象とする面白い興味本位の記事はあまり掲載せず、しまいにはむしろタイトル『少年』とは反対に成人を対象とする一般啓蒙誌になつてしまつた」と述べているように、『少年』はその創刊号から「児童文学」的な要素は探し難い。崔南善は『少年』発刊の目的について、次のように述べている。

『少年』の目的を簡単に言うると、新大韓の少年として覚醒した人物となり、考える人物となり、分かる人物となり、やり遂げる人物となつて、一人で背負つた重い荷に堪えられるように指導するためである。³⁷

新韓国の大国民養成を第一の目的とした崔南善は、「我が大韓を少年の国にせよ」と唱え、少年を指導するための第一歩として『少年』を創刊した。「教育救国思想」を主唱した愛国啓蒙運動の実践となつた『少年』から捉える「児童文学」的意義は、海外物の翻訳による「少年文芸物」の導入を試みたところにある。

一九一〇年、通巻二〇号が発売禁止と停止処分を同時に受けた後、三ヶ月ぶりに解禁された『少年』は、同年一二月の通巻二〇号から続刊されたが、翌年五月まで二回刊行しただけで再び発刊停止になる。そして一九一一年五月、第四年第二巻を最後に廃刊される。

『少年』以外にも新文館では、福沢諭吉の『修身要領』や『口

ビンソン漂流記』、『大韓地誌』、『外国地誌』などの様々な単行本を発刊していた。『漢陽歌』、『京釜鉄道歌』、『世界一周歌』などの唱歌本も新文館から発刊された。また、新文館からは『少年』の廃刊後、『赤い上着』(赤い上着)という新しい雑誌が創刊される。趙容萬の『六堂崔南善』によると、李光洙の紹介で上京した金興濟が新文館で起居することになり、崔南善が真面目な金興濟に『赤い上着』の発刊を任せたとする。『赤い上着』は一九一三年一月、金興濟を発行者として創刊された³⁸。この雑誌の体裁は四・六倍判で、計一八面程度で月二回ずつ一九一三年七月まで一度も押収されることなく、通巻一二巻を出した後、総督府の命令で廃刊に追いやられた。

『赤い上着』創刊の意図と意欲は、『子どもの読み物』第一号(一九一四年八月)の広告欄にみることができる。

『赤い上着』は、我が児童教育に適當な補助機関がないことに憤慨した新文館から発行されてきたが、第拾貳号に至つて官令により廃刊された。我が児童文学の先駆として趣味と実益の宝庫として歎呼の声が広く鳴り響いたものである。今回、余存した数百部を一冊に合本して低価で提供する。まだ読んでいない父兄及び子弟はすぐにでもぜひ購覽してください。

(大大板九十頁)

「掲載要目」

詩歌—オンジン弥勒・初春・蝶遊び 外八篇

古歌—温達・率居 外数篇

童話—娘のガツコツ(且正忠忠)・四人の弟・バツコアゲ(浮田忠) 外八篇

寓語—数一〇篇

訓話—くせ・頑固 外七篇

史談—鄭夢周・金時習・ニユウトン・ナポレオン等

学芸—龍の昇天・飛行船と飛行機等数篇

意見交換(忠正) — 問題・解答二〇余種

物類番説—ラクダ・角牛・ココア 外一〇種目

笑話—数一〇題・戯画一〇余・挿絵無数 その他³⁹。

この目次からみる雑誌の構成は、童話、寓話、訓話のような物語が中心となつており、評論や論説などは見当たらない。「我が児童文学の先駆」なることを自負していた『赤い上着』に対して李在徹は、「実質的な児童をその対象としていたところにもつとも意義がある」と評価する。また崔南善自らによる次のような証言からも、児童文芸物を掲げた初めての試みに寄せられた当時の関心が窺われる。

『少年』誌から『青春』誌が出るまで、児童雑誌には『セツピョル』『赤い上着』等が出て、『少年』『青春』がいずれも二千部しか印刷できなかったのに比べて、『赤い上着』だけが三千部を出した⁴⁰。

『赤い上着』が一九一三年七月に終刊した後、崔南善は金與濟を日本留学させ、まもなく自分も東京に渡る。崔南善は東京に来ると、決まって東洋文庫から古い本の原本を買い求めたという⁴¹。一ヶ月あまりで帰国した崔南善は同年九月、また新しい雑誌、『子どもの読み物 (こどものよみもの)』を出版した⁴²。タイトルのままに、子どもの読み物となったこの雑誌は、一九一四年八月の終刊まで一年間通巻一二号を発刊した。『少年』や『赤い上着』とは異なつて、人名を除いては一切漢字を使用せず、ハンゲルのみで書かれたところに『子どもの読み物』誌の特色がある。「表紙」「木板」「作品懸賞」など、漢字で出来ている言葉は、「세지」「고지」「고지」「고지」のような平易なハンゲルで書き表すことに努力を払っている。

以下、雑誌の構成をみるために通巻第七号の目次を引用する。(カッコの説明は筆者による。)

表紙

槍と弓を持つて白馬に載っているよろい姿の將軍と左側下

端には虎の顔 (全版同じ)

日本の神社 (写真)

つる、ラクダ、鉄棒運動 (木板絵)

おしゃべりお嬢さん (童話)

漫画 (西洋の絵付)

素早さと力 (大人の素早さに関する逸話)

三名の学者 (短い物語)

歯を売って親を介抱した親孝行 (物語)

液体空気と液体酸素 (教科用)

笑話 (短い面白い話)

子ども新聞

利になる昆虫の話

意見交換 (数学問題)

作品募集 (八名の文章を掲載、賞金授与者一五名の名簿、問題の正

解者四二名の名簿)

ハンゲルのほどこ書き⁴³

読者寄稿用の原稿用紙

『子どもの読み物』は、童話と物語を中心に構成されている。また、鳥や運動種目などを分りやすく絵で説明しており、西洋の漫画も挿絵に用いている。募集作文にも力を注いでいたが、その規定には「物語は必ず朝鮮に昔から伝わっているものにする⁴⁴こと、外国のものを翻訳したり、書写したりしてはいけません。世間にありふれた物語は避けてください。」⁴⁴と明記して、朝鮮固有のものに愛着を覚えるといった傾向をみせている。

崔南善による児童文芸誌としては最後となる『セツピヨル (세피요)』の創刊、終刊年月についても異なる記録が多い⁴⁵。李在徹によると、『子どもの読み物』が創刊された一九一三年九月と同年同月に『セツピヨル』も創刊され、一九一五年一月まで全一六号を出した後終刊されたという。

洪一植は『六堂研究』において次のように述べている。

六堂の言葉を借りると、『セツピョル』は前記『子どもの読み物』の後を継いで刊行した同流の児童雑誌であったが、少し違うところは、『子どもの読み物』の「叫び」「欄をここでは「호오호」といて、文芸講座のようなものをたくさん文章として見せ、また評価や募集もして新文章建立運動をもっと活発にしたことである。そして当時の各学校ではこの「호오호」欄を作文教科書に使用していたことである。⁴⁶

この説明を裏付けるものに、『青春』第三号の裏面に掲載された次のような『セツピョル』の広告がある。

本誌は旧『赤い上着』以来に少年文学の先駆となつて江湖の歡迎を博したものである。一月から内容・外形に一大革新を加えて程度をやや高くして有益な勉強にこの上ない良師・良友を作るのに努力し、より新文章の造成に力を注いで我が語文の精華を發揮するようにしたので、低価で最大の益を求める者は本雑誌外に皆無のこと。本誌で連載する「호오호」はもはや京城の各私立高等程度学校の必須参考書に採用されており、地方でも漸次採用されている。⁴⁷

『セツピョル』には、外国の童話を翻訳・翻案したものが多く掲載されていたが、第一六号においては、「西国名話集」の企

画欄が設けられ、「マツチ売りの少女」などの西洋童話が紹介された。

以上見てきたように、崔南善は『少年』終刊後、『赤い上着』『子どもの読み物』『セツピョル』の雑誌を続々と出版、いち早く朝鮮に「児童文芸物」を紹介していた。『子どもの読み物』以後は、完全な児童雑誌としてのスタイルを備えていたとみられる。特に募集作文に払った努力と純ハングルの使用は、子ども向きの文章を生み、数多い童話の紹介は、子ども向きの文学への認識を促したと考えられる。しかし、「児童文芸物」に対する崔南善の努力は、社会一般に波及して児童文学の大衆化を確立するまでには至らなかった。海外物の翻訳、翻案によつて雑誌の構成面においては「児童文芸物」になり得たが、「児童」や「児童文学」に関する根本的な認識が崔南善には欠けていたのである。彼は、朝鮮に「児童」の存在を覚醒させ、「児童文学」を生み出そうとしたというより、近代的な新文物を持ち込み、自主独立と新教育、新思想を鼓吹させることに主力を注ぎ、また、滅びていく不安定な国勢を目の前にして、将来の担い手となる少年の指導に励んでいた。このことは、朝鮮社会に、まだ児童文学を受け入れるような基盤が出来ていなかったことをも意味する。

一九二三年の朝鮮口演旅行を終えた巖谷小波は、「以前来た時には折角話をして少しも反響がなかったが今度は驚くほど反響があつた」⁴⁸と発言している。一九二三年の朝鮮口演では少しも反響がなかったのが、一九二三年における口演では驚く

ほどの反響があつたというのだ。これは、一九一三年に行なわれた崔南善による初めての試みが児童文学を勃興させるまで、後一〇年を待たなければならなかつた朝鮮の状況を反映していると考えられる。

『セツピョル』を終刊した後も崔南善は次々と雑誌を刊行した。しかしその次から出版された雑誌は、学生や成人を読者対象としていて、児童文芸物とはいえないものであつた。崔南善は『セツピョル』の次に出版した『青春』⁴⁹の創刊にあつて、「我々は学ばなければいけません」と唱えている。国を建て直す道はたつた一つ、学ぶことしかないと述べ、近代的な教養と科学知識を身に付けることが何より必要だと主張する。『少年』の趣旨を受け継いでいるこのような考え方によって、今後の崔南善の雑誌の趣旨は児童向けというよりは、青年の啓蒙・教養を重視する方に傾いていったと言える。

二 『開闢』から『オリニ』の誕生まで（一九二〇年代）

崔南善の活動とともに、朝鮮における「近代児童文学」の成立に深く関わっているのが天道教の思想と活動である。天道教⁵⁰の第二代教祖、海月崔時亨が一八八五年に説法した「海月法説」には、「人是天、天是人、人外無天、天外無人」とあり、「人は天、事人如天」という、天道教の基本理念である「人乃天思想」が説かれている。また、天道教の経典には次のような節が加えられている。

私は婦人と子どもの話でも学ぶことがあれば学び、尊敬することがあれば尊敬する。（中略）自分の子どもと嫁を大事にし、召使を自分の子どものように大事にし、禽獣でも大事にし、木や芽を折らないで、親のいうことをよく聞きながら笑顔で向かうこと、幼い子どもを叩かず、泣かせないこと。子どもも神様を祭っているので、子どもをぶつことは神様をぶつことになつて神様に逆らうことになる。⁵¹

このように、人間尊重・万人平等思想を基盤にしている天道教の教えには、児童尊重の傾向が見られる。これに関して金正義は、開化期における少年愛護思想の鼓吹は東学の少年愛護思想から始まつたと述べ、「海月崔時亨は少年運動を胎動させた先覚者である。」⁵²と主張する。

東学⁵³は、一八九四年に起こつた大規模な民衆革命運動である甲午農民戦争によつてよく知られている。甲午農民戦争をきっかけとして、中国と清の勢力を排除し、朝鮮を支配しようとした日本は、公使館警護と在留邦人保護の名目で大軍を繰り出し、日清戦争を引き起こした。当時朝鮮の民衆は、政府の財政危機を取り繕うための重税政策、官僚たちの間の不正収奪の横行、日本人の米の買占めによる米価騰貴などに苦しんでいた。そこで農民たちは、日本への米の流出の防止、腐敗した官吏の罷免、租税の減免を要求して立ち上がったのである。この民衆革命運動を指導したのが、東学教団の幹部であつた全⁵⁴準や金

開南などであった。東学組織を使つて各地の蜂起を統一し、このとき立ち上がった農民は二〇万人を越えたといわれる。しかし、農民軍の敗北で教祖崔時亨は一八九八年に逮捕、処刑される。東学布教は一九〇五年ごろから公然化した後、天道教、待天教などに分裂するが、天道教が主流となつて、民衆のなかに広まつていく。

天道教は一九一〇年以降になつてから、抗日民族運動と並行して新文化運動を展開することになる。天道教の新文化運動は、雑誌出版事業を中心に行なわれた。その出版文化運動を主導したのが第三代教祖の孫秉熙(ソン・ヒョンヒ)であった。一九〇二年三月、二四名の留學生を連れて渡日した孫秉熙は、その後二回にわたつて六四名の學生を日本に留学させながら、教育を通じた自主自立を図つた⁵⁴。日本から帰つてきて、一九〇六年二月二七日に活版印刷所である博文社を設置する。そして四月二六日に博文社を株式会社普文館に拡張変更し、教書的大量印刷とともに日刊新聞の『万歳報』を発行した。普文館を解体した後の一九一〇年には、彰新社を創設する一方で、普成学校を引き受ける。そのとき、普成学校の附属出版印刷所の普成社も併せて引き受けることになつて、普成社と彰新社を合併して普成社という名称で施設を大幅に拡張した。

しかし、『天道教会月報』や天道教の教材、学校の教科書などを、恒常的に低価あるいは無料で印刷して配つたので、普成社は赤字を免れることができなかつた。赤字の普成社を弊社することを建議したある幹部に対して、孫秉熙は次のように答へ

たという。

我々は營利のために働いてゐるものではありません。(中略) 国家が普段、たぐさんのお金をかけて軍隊を維持していることは、非常事態に備えるためです。我が出版社が、非常に、軍隊よりもつと重要な役割をするかもしれませぬよ⁵⁵。

そしてこのような自分の発言を証明するように、一九一九年の三・一独立運動⁵⁶の時、普成社は独立宣言書を印刷、配布する役割を果たした。しかしながら、一九一九年二月二七日に独立宣言書を二万一千部印刷、同年三月一日に朝鮮独立新聞を創刊、一萬部を発行した普成社は、同年六月二八日に放火で焼失してしまふ⁵⁷。

三・一運動に直面した後、日本政府は従来のいわゆる「武断政治」から転換をはかり、政治的基本線は変えない範囲で、民族的要望をできるだけ聞く政策をとつた。一九一九年八月一日「朝鮮総督府管制改革に関する詔書」の公布において、原敬首相は「内地朝鮮とも帝国疆土内にて、何等差異あるべき根本理由がなければ、漸次、内地と同様なるに至らしめんこと、朝鮮に対する終局の目的なりとす。かくして始めて併合の趣旨も貫徹すべく」と発表した。この方針を受けて、同年九月着任した斎藤総督は、就任の最初の訓示の中で「文化的制度の革新」「文明的政治の基礎を確立」の語を用いて、いわゆる「文化政

治」を標榜した。管制により、従来総督が武管制であったのを文官でもなり得ることとし、「安寧秩序」保持のために必要と認めるときは、朝鮮における陸海軍司令官に、兵力の使用を請求できることとなった。また憲兵警察制を廃して、警察による治安維持策をたてた。日本人と朝鮮人の官吏の官等俸給制を共通にし、判事、検事は日本人、朝鮮人の権限上の差異をなくした。公立普通学校長をはじめ朝鮮人の任用面をひろげると同時に、官吏や教員の官服と帯剣を廃止した。そして一九二〇年に入って朝鮮人の民間新聞『朝鮮日報』『東亜日報』『時事新聞』の発刊を許可した。

日本が朝鮮支配の政策を変更した主な要因は、大規模な三・一運動に対する武争弾圧にもかかわらず抗争が続くなかで脅威を覚えたこと、ウイルソンの民族自決主義の影響による植民地の独立意識の高揚で植民政策の危機を感じたこと、一〇月革命に鼓舞された朝鮮最大の大衆運動で、ロシア革命の前例でみる思想的な動きの脅威、大戦後の恐慌の打開策として、朝鮮の資本収奪による内地の経済不況の緩和をはかる目的、帝国列強の植民政策の反省が問われる時期に、米・英による日本の朝鮮弾圧策の批判から国際世論を意識したことなどが挙げられる。「文化政治」を通して朝鮮には、一視同仁、形式主義の刷新、民意暢達、教育の刷新、地方制度、産業の開発、交通、衛生、警察制度の改革、財務、救恤、宗教、慣習及文化の尊重の新施政が行われた。⁵⁸

天道教の動向をみると、三・一運動を主導した嫌疑で教祖の

孫秉熙が逮捕された後も、一九一九年九月二日に「天道教青年教理講研部」を組織して引き続き新文化運動を展開していった。一九二〇年に「天道教青年会」に改称した「天道教青年教理講研部」は、青年運動の基調となった。そして大衆啓蒙事業の手段となる言論機関の必要性によって、一九二〇年三月に開闢社を設立する。李敦化、方定煥、金起田、朴達成、李斗星、鄭道俊、朴来弘、金玉斌などを中心メンバーとする開闢社は、『開闢』誌をはじめ、様々な雑誌を刊行する。⁵⁹

「文化政治」による言論規制の緩和によって、『開闢』誌が創刊された一九二〇年から廃刊される一九二六年の八月一日まで、天道教雑誌を除いてもおよそ九一種の雑誌が続出していた。⁶⁰このように周辺雑誌がおびただしい数にのぼっていたにもかかわらず、『開闢』は、全国的な販売網と積極的な販売戦略をもって幅広い読者層を獲得していた。呉榮根の論文『『開闢』に関する書誌的研究』による「開闢社の支社・分社・分買所の地域分布状況」⁶¹によると、全羅道二二箇所、慶尚道一五箇所、清州道一箇所、忠清道四箇所、江原道三箇所、京畿道一箇所、黄海道七箇所、平安道二五箇所、咸鏡道一八箇所、そして海外にも一一箇所の地域に支社を保有していたという。また『開闢』は、一九二〇年代に新聞紙法⁶²によって刊行された唯一のものでもあった⁶³。廃刊までの六年二ヶ月間、通巻七二号を出版した『開闢』は、発売禁止三四回、停刊一回、罰金一回の処分を受けている。

創刊号から発売を禁止された『開闢』は、号外の臨時号とな

つて創刊される。『開闢』創刊号に掲載された児童文芸物なる読物に、「可笑しい話」と「笑話」が掲載された。いずれも「イソップ物語」に教訓の言葉を付した形で構成されている。『少年』創刊号に「イソップ物語」を掲載した崔南善は、「最後には有名な内外教育家の解説を付けておくので、易しい話のなかに深くて難しい理致があることを悟り、処身行動に有助することを願う。」と前提していたが、そのような「教訓重視」の態度は『開闢』創刊号まで続いていたのである。また、強我之が「友へ」という詩を通して、「友よ、どうか自我主義に目覚めなさい、どうか自力主義を身に付けなさい、どうか生の要路へ進みなさい」と、少年の自覚を促している。『開闢』の創刊号には、朴達成の「緊急に解決すべき朝鮮の二大問題」という言説も掲載されている。そこには、朝鮮が直面した緊急問題に「教育問題」と「農村問題」が取り上げられ、教育と殖産を二つの柱とした国権回復運動のもと、「開化思想」と「教育救国思想」が唱えられている。

そして最も注目しなければならぬ論説に、『開闢』第二号を通して世に出された金小春の「長幼有序の末弊」がある。

長幼有序のもともとの意味——即ち、最初に五倫を教えた人の意思によると、大概は礼儀作法上における長幼の順序をいったものの、決して長者が幼者の人格を無視するまでの位序を決めたものではない。(中略)要するに、第一に幼年も人間である。二千万兄弟のなかの一人であり、世界十

六億万人のなかの一人であり、将来に大きな運命を開拓していく働き手の一人なので、彼らの人格を認めなければならない。そうすることによって、長幼の間に新しい道を開き直すべきである。このような精神を長者である我々が各自に身に付けると、長幼有序の末弊によるあらゆる悪習を改善することができると同時に、半島の数百万の幼い男女は、因習の恐るべき弊害から解放されるであろう。最近、女性解放論が隆盛になっているにもかかわらず、児童解放論はどうして伝えられないのか。

と、金小春は「幼年も人間である」ことを宣言、「幼年男女の解放」を提唱した。それまで「人格」をもった「人間」としての認識がなかった「幼い男女」に対して、一人前の独立した人格を備えた人間であることが、朝鮮で初めて主張されたのである。

崔南善が唱えていた「少年」は、「剛健で堅確で窮通」な人物を目指して万物の理知を探究する「我が大韓の少年」であり、「活動的進取的発明的な大国民」になり得るため智力を備え、我が国及び世界文化に大貢献をなす「我が大韓の少年」であった。そのような崔南善の「少年思想」を受け継ぐ一方で、一九二〇年に至っては、「少年」から分離された「幼い男女」の独自の価値を唱える、「児童解放論」が登場したのである。金小春による「児童解放論」の台頭が、天道教の基本理念をその基底においてこそ可能にしたのは言うまでもない。

長幼有序などの儒教的因習の問題を指摘、悪習の打破を主張する論説は、『開闢』を通して々と発表される。『開闢』第一四号においても、

朝鮮児童に対する無礼は、その根本原因が児童に対する情
的教育の欠如にある。儒教の形式的な倫理を生き方として
いる朝鮮の人々は、一般的（家庭でも社会でも）に児童に対
する対等な礼遇をもたない。児童を教育する場合は、威圧
的あるいは独断的に「そうしてはいけない、それは出来な
い」というようなやり方を取る一方である。⁶⁵

と、儒教の形式的な倫理の脱皮が促されている。そしてその具
体的な改善策として、「児童相互間の敬語使用」が提示され、『開
闢』第一六号を通して述べられる。『開闢』第一六号の「我が
静中動観」では、京城の啓明倶楽部が同部総会の決議によつて、
学生相互間に敬語を使うことを総督府当局に建議したことを報
じている。「当局に建議したことで満足せず、一般社会にこれ
を徹底的に宣伝し、まずは部員の各自が各自の家庭児童間にお
いてこれを実行すること」⁶⁶を奨励している。

『開闢』第一五号の「生活の条件を本位とした朝鮮の改造事
業」において、「少年の朝鮮半島」なることを主張した李敦化
は、第一八号に「新朝鮮の建設と児童問題」という論説を発表
する。これにおいて、「恒常十年後の朝鮮を忘れないこと」を
主張、新朝鮮を改造するためには児童問題の解決が何よりも重

要だと述べ、児童問題の解決こそ将来のあらゆる問題を根本的
に解決する重要な部分だと論じる。そして児童問題を解決する
ためには、次の三つが優先されるべきだと主張する。その三つ
とは、「児童尊敬の風を養うこと」、「児童保護機関を設置する
こと」、「少年指導機関と貧児教育方針をたてること」である。

この他に『開闢』を通して児童問題を扱い、「児童解放」を
唱えている論文は、第一七号（一九二二年一月一日）から第二一
号（一九二三年三月一日）まで、五回にわたつて連載された魯唾
子の「少年へ」、第二三号（一九二三年五月一日）の金秉濬の「新
学年入学難と我が覚醒」、第三一号（一九二三年一月一日）の趙子
ヨルホの「少年軍団！朝鮮（ポトイスカウト）」、第三三号（一九二
三年三月一日）の朴達成の「朝鮮教育界と教育資格問題」、第三
五号（一九二三年五月一日）の起塵の「開闢運動と合致される朝
鮮の少年運動」などがある。

五回にわたつて「少年へ」を連載した魯唾子は、「少年へ（其
二）」において次のような意見を述べる。

このような相互不信から生じる結果のなかで、最も恐ろし
いのは団体生活の不可能である。一民族の生活とはもはや
一大の団体生活であり、その民族生活はまた無数の大小団
体生活の集積なのである。産業団体、教育団体、宗教団体、
修養団体、慈善事業や娯楽、運動を目的とする団体、各種
学者の団体など、一民族の生活はこのような各種の団体生
活を細胞として組織された大団体生活である。国家を個人

の集合とみる面があると同時に、個人の集合である大小諸団の集合とみる一面もまたあるのである。(中略)このようなあらゆる団体が健全で興旺でなくてはその民族生活は衰退を免れない。自由団結は、社会的にも政治的にも今日においては国家の政治制度のように重要な、また相互分離できないものなのである。⁶⁷⁾

少年に向つて「自由団結」を提唱、「全民族的な団体生活が不可能になるとその民族は滅亡するしかない」と警告した魯唾子は、『開闢』第二〇号の「少年へ(其四)」においても、次のように「少年同盟」を主唱する。

朝鮮の少年男子よ、女子よ、朝鮮の運命の指針を動ける原動力は我々の手にある。我々はその力を發揮出来る人物になる為、工夫するように同盟しよう。⁶⁸⁾

このような主導概念に導かれ、もはや天道教内では、少年の団結を図る動きが活発に起こっていた。一九二一年五月、開闢社の主幹である金起田、李定鎬、方定煥が「天道教少年会」を組織したのがその始まりであった。三〇余名で始まった「天道教少年会」の会員は、同年一〇月には三七〇名となり、急速に「少年運動」を組織化・体系化していった。無視や軽視の対象から、「児童尊重」の風潮を生み出していく新生の流れの勢力に乗りながら、朝鮮の「少年運動」は成長していったのである。

前述したように、一九一九年九月二日に「天道教教理講研部」が組織されたが、これが一九二〇年に「天道教青年会」に改称、この中に一九二一年四月に「少年部」が設けられ、五月一日に「天道教少年会」となった。『オリニ』創刊号の一面に、次のような記述がある。

書店や講習所や主日学校ではない、社会的会合の性質をもつ少年会が我が朝鮮に出来たのは、慶尚南道晋州で組織された晋州少年会が最初でした。(以下九行削除)再昨年(の春、五月一日にソウルで誕生の産声をあげた天道教少年会、これは我が幼い仲間三十余名が集まって組織したもので、朝鮮少年運動の初鼓動でした。⁶⁹⁾

また『開闢』第一六号の「可賀すべき少年会の自覚」には、

該会(天道教少年会)規約の「第二」條をみると、「本会は會員の徳性と身体の發育を図つて健全な少年を育てるのを目的」としているし、またその規約の「第九」条には、「この会の目的を建てるために、遊樂部と談論部と学習部と慰悦部の四つの部を設けて、遊樂部では遊戯と運動を行ない、談論部では談話と講論を行ない、学習部では社会各方面の實際を学習し、慰悦部では會員であるか、そうでないかを問わず、時と境遇に相応する慰問とお祝いを行なうこと」といつて、その会の目的と事業を知ることができる。⁷⁰⁾

と、「天道教少年会」の目的や活動が述べられている。引用部分の続きには、同会の活動のなかでも特に「会員相互間に敬語を使用すること」、「お見舞い、お祝い、追悼会などを通して少年の人格自尊心を養成すること」、「休日には必ず団体で名勝古蹟を尋問すること」、「毎週二回の集会を行なうこと」の四つの活動を注視している。

少年運動について詳しく論じられている仲村修の「朝鮮初期少年運動（一九一九〜一九二五年）と児童文学」⁷¹によると、少年運動は、一九一九年の三・一独立運動を契機として広がっていったことが分かる。一九一九年に「元山韓国少年団」、「安辺少年会」、「倭館少年会」、「横城少年会」などが、一九二一年一月には「晋州少年団」が一足早くつくられていたが、「天道教少年会」は全国規模で組織されたところに意義がある。

一九二二年三月一日発行の『開闢』第二一号には、魯唾子の「少年へ（其五）」が掲載されている。「少年同盟とその具体的考案」という副題のもと、魯唾子は引きつづき同盟の必要性を唱え、次のような同盟の具体的な方法を提示する。

- ・ 団体の各員の意思がその団体の趣旨に対しては絶対的に一致すること。
- ・ 団体の法を厳守すること。
- ・ 団体の各員が団体及び信ずる他の団員を愛すること。
- ・ 団体の各員は団体の行為に対して行動を共にすること。

・ 団体の目的した事業を成し遂げるような経済的基礎を確立すること。⁷²

このような指針に導かれ、「天道教少年会」は一九二二年五月一日に創立一周年を迎える。その日を「子どもの日」に指定して記念行事を行なった。この朝鮮初の「子どもの日」について、『セクトン会子ども運動史』は次のように記す。

『子どもの日』は『セクトン会』会員である方定煥先生提唱し、天道教少年会の名義で公布された。第一回の記念式は、天道教の金起田により、天道教少年会（指導委員、金起田・方定煥）を母胎に組織された朝鮮少年運動協会の主催で行なわれた。⁷³

「天道教少年会」を中心とした少年運動が展開されていく一方、一九二二年六月、開闢社は『愛の贈り物』という童話集を出版する。『愛の贈り物』には、アンデルセン童話やグリム童話、アラビアンナイトなどの世界名作童話一〇作の翻案物が収められた。一九二五年に八版（二六〇〇部）、一九二六年二月に九版、一九二六年七月に一〇版と再版を重ねたほど⁷⁴、『愛の贈り物』は大好評であった。『開闢』第二六号（一九二二年八月一日）に出された『愛の贈り物』の広告欄をみると、「小波方定煥氏訳」と記されている。『愛の贈り物』の著者で、今現在も韓国児童文学の先駆者として名高い方定煥は、このときから「小

波(ソバ)」という筆名を公式的に用いていたのである。

天道教の第三代教祖、孫秉熙の三女の婿でもある方定煥は、一九二〇年九月一日を前後に渡日し、東洋大学の聴講生となる。日本滞在中に『愛の贈り物』を仕上げた方定煥は、『開闢』の東京特派員と天道教青年会の東京支社長職を兼ねていて、京城と東京を往来しながら『開闢』と『天道教月報』を通じた執筆活動を続けていた。一九二二年三月三〇日に東洋大学を退学した後は、『天道教少年会』の創立一周年記念行事、『愛の贈り物』の出版、童話大会開催、講演会、童話創作など、本格的な児童事業を展開していった。

一九二三年一月に発行された『開闢』第三一号には、「小波」の筆名で「新たに開拓される(童話)に関して」が載せられている。ここで方定煥は、「童話の(童)の字を見ただけでも一部の読者以外の一般の人々のほとんどは、知らん顔をしてきた」と当時の童話に対する認識を指摘、次のように述べている。

童話はその少年―児童の精神生活の重要な一面であり、緊要な食物である。文化的に進化した現代においては、我々人間的教養の一要素として芸術が絶対的に必要であるように、現代の児童にはその人間的生活の要素として童話が要求されるのである。

童話の「童」は児童の「童」であり、「話」は説話であるから、「童話」というのは児童の説話ないし児童のための説話である。⁷⁶

また、童話が児童に与える「情愫の啓発」、「徳性の育成」、「同情心、正義心の育成」、「宗教的信仰の基礎」などの利益について述べ、「決して教訓だけが童話の正面の目的ではない」ことも指摘している。童話は少年少女だけに読まれるものではなく、「広く人類があまねく読むべきものであり、作家も常に大人が小児に与えるものを書くのではなく、人類のもっている永遠の児童性のために童話で書くのである」と述べる。方定煥のこのような主張は、「童心」の尊重を呼びかけとして、また「児童の発見」としての意味をもつものであった。この時まで朝鮮に発行されていた童話集には、韓錫源の『雪の花』、呉天錫の『金の鈴』、方定煥の『愛の贈り物』しかなかったが、そのような状況のなか、方定煥は「童話の普及」を主唱していたのである。

方定煥の「新たに開拓される(童話)に関して」が『開闢』に掲載されて二ヶ月後の同年三月二〇日、開闢社から方定煥主幹の児童雑誌『オリニ』が創刊される。「韓国における最初の本格的な児童雑誌」⁷⁷と評価され、「近代児童文学の始発点」⁷⁸とされる『オリニ』は、一九三四年七月に通巻一二二号で休刊、解放の三年後に復刊されて一五ヶ月間続刊された後、廃刊される。その後一九四八年五月に一二三号をもって、もう一回復刊されるが、一九四九年一月(三七号)、完全な終刊となった。一九二三年二月一日発行の『開闢』第三二号には、天道教少年会による『オリニ』創刊号の広告が載っている。そこには、

「少年運動の第一歩で、少年雑誌（毎月二回）オリニ、三月一日（から発行）、我々はまずこれをもつて種をまく」と記されている。また『開闢』第三二号（一九三三年三月一日）には、『オリニ』創刊号の目次まで記された次のような広告が掲載された。

我々は先ずこのように新たな種をまきます。新雑誌『オリニ』創刊号

子どものように純潔なものもなければ、子どものように正直なものもなく、子どもの心のように尊貴な芸術もありません。子どもの世界、あそこには、いつも百花が満開しています。あそこに入れる人は幸せな人です。

『オリニ』創刊号の内容
我々はこのようにやり遂げて来ました。

（朝鮮少年運動の記録）

本当の童話、マツチ売り少女

ツバメのような露西亞少年

歌の袋（朝鮮童話劇）

青い鳥（南鮮童謡）

ヒヤシンス物語（三月の花の伝説）

自働電話、確かに中東学校の生徒でした、トイレに行きたい人の悪いワザ

仏西童話、いたずらっこ鬼神

歩きなさい（イソップ氏の幼年逸話）

鬼の耳、世界消息、地方少年会通信

面白くて有益な、懸賞問題

このように色んなものを満載しても本代はたったの五銭

広告の枠には、「大人もこれを読んで、子どももこれを読もう。先ずあなたが読んで、それから必ず幼い子女に読ませませう」と記されている。広告の左側には「世の中の紳士諸賢と子弟をもつ父兄への告」と題した「今の我々にたった一つ希望をもたせるものは、明日の朝鮮の担い手、少年少女たちをよく育てることしかありません。あなたの家庭のためにも、朝鮮全体のためにも、そのみが確実な我々の活路であります。」というような記述も付されている。そして、広告の最後には「義庵孫秉熙先生」と「芝江梁漢默先生」の顔写真が掲載されている。

上記の広告に示されているように、『オリニ』は「天道教少年会」を中心に展開されていた少年運動の第一歩として創刊された。「少年運動」の具体的な活動内容をみると、「数の多い順に列挙すると、雄弁大会・歌劇（舞踏）会・討論会・童話（大会）・講演会・音楽会・そのほか童謡童話会・音楽舞踏会・演芸会・演劇会・学芸会・学芸展覧会（書画展覧会）・幼燈会・活動写真（トーキー映画）会・早起き大会・蓄音器演奏会」⁷⁹などがあつた。『オリニ』主催で毎週のように様々なイベントが行なわれており、『オリニ』の「地方少年会消息」欄や「新消息」欄を通してその成果が報告されていた。「嬉しい知らせ」欄を通しては、新たに組織された少年会を紹介している。当時の新聞においても、全国各地で行なわれていた少年会の創立式や記

念行事、童話会、歌劇会などに関する記事は目立つほど頻繁に掲載されている。

『オリニ』を考える際には、「天道教少年会」の他、もう一つ忘れてはならない組織がある。『オリニ』の創刊と時を共にして、一九二三年五月一日に東京で創立した、朝鮮最初の少年問題研究会、「セクトン会（세クトン회）」である。『松明』第一巻第五号（一九一九年五月一日）には、「セクトン会特集」が設けられ、セクトン会の同人であった尹克榮、李軒求、鄭寅燮、曹在浩、秦長燮の文章が寄せられている。それによると、まず尹克榮は、一九二二年の秋に名前だけ聞いて知っていた方定煥が自分の所を訪ねてきたことを回想している。子どもの養成を急がなくてはいけない、我が童心を取り戻そう、といった方定煥の情熱と誠意あふれる話しぶりに尹克榮は説得されたという。そして尹克榮は、「おそらく小波は、夢遊病患者のようにあつちこつち同志を求めて歩き回つたようであつた」と述べる。

方定煥の努力によつて結成された「セクトン会」は、一九二三年三月一六日、東京の方定煥の下宿先⁸¹で第一回目の会合を行なつた。会録⁸²によると、方定煥、姜英鎬、孫晋泰、高漢承、鄭順哲、趙俊基、秦長燮、丁炳基が出席している。会合による決議事項をみると、その一番目が「趣旨、童話及び童謡を中心にして一般児童問題までも行なうこと」となつていて、童話・童謡の育成にその重点をおいていたことが窺われる。曹在浩は、『オリニ』誌の創刊号を私が見たのは、セクトン会が発足する前に同人になる何人かが集まつた席で、小波がさし出しなが

ら説明するのを見た」と述べている。この発言は、方定煥を中心としたセクトン会によつて『オリニ』が誕生したことを裏付けている。すなわち、セクトン会の趣旨の実践を『オリニ』で示していたのである。

また曹在浩は、「オリニ」という言葉を初めて用いたのは方定煥であり⁸³、その言葉をすぐに少年誌名の「オリニ」と決めたのも方定煥だつたと述べている。そして「セクトン会」という会名は尹克榮の提案に全員が賛成して決定した。この言葉は、セクトンチヨゴリ⁸⁴が朝鮮の少年だけが着る服だという意味から発案されたものであつた⁸⁵。

方定煥は、「세르○チヨムニ（若者の意味―筆者注）」と「세르○ヌルグニ（年寄りの意味―筆者注）」に対等する、「오르○オリニ」という言葉の定着に力を注いだ。「オリニ」という言葉の定着は、同時に児童観の確立に密接に結びついている。「세르○」や「세르○」という言葉と肩を並べるように「오르○」という言葉が定着したのは、「오르○」を独立した一人前の人格体として認める認識が定着したことを意味するからである。

『天道教と幼少年問題』において方定煥は、「第一、幼い子供には大人の世界とは全く違つて、全く異質の世界一つが別に存在することを、幼少年と向き合う人々は十分に理解しなければならぬ。」と指摘していた。児童尊重の実践事項としては、子どもに敬語を使うことを奨励していたが、天道教少年会でも「会員相互間に敬語を使用すること」を遵守していた。方定煥自らも子どもに対して敬語を用いていた。それに関して尹石重

は次のようなエピソードを述べている。

私はあのとき天道教堂の向こう側にある校洞普通学校、一二歳の三年生であった。(中略)ある日のこと、本を包んだ風呂敷を抱えて歩く途中、小波(ソバ)に会った。私は、その背中に向かって「方先生」と呼んだところ、「どうしたんですか?」といいながら振り返るのではないか。私の後ろに外の大人がいるかと思ひ、私も振り返って見たが、誰もいなかった。一二歳の幼い私に彼は礼儀正しく敬語を使ったのである。後で分かったことだが、昨年、天道教少年会で起こした子ども日に「子どもに敬語を使おう」というピラを配って、「オリニ」雑誌も最初から最後まですべて「こうしました、ああしました」になっていた。大人からの敬語を生まれて初めて聞いた私は却って恥ずかしくなり、そのまま家に駆けて帰ってしまった。⁸⁶

この尹石重の文章には、当時の児童に対する一般の人々の態度と児童の大人に対する認識が如実に現れている。大人が子どもに対して敬語を使うことは、児童に対する待遇上、画期的な試みだったのである。

こうした児童運動は、子ども固有の世界の認識の变革を促し、「子どものための芸術」へとつながった。天道教を背景とした児童運動は、『オリニ』の誕生という一つの結晶となつて朝鮮児童文学の定着に大きな貢献を果たした。

三 児童文学を通じた少年運動をめぐる

一九二三年一月一日付の『東亜日報』『新年号』には、黄錫禹の「新年文壇に望む」が掲載されている。そこには、「農民文学を興隆させよう、労働者文学を興隆させよう、児童文学を興隆させよう、創作活動を実践しよう、活発に批評しよう。」という主旨が訴えられている。『朝鮮日報』も、一九二三年を迎えて「新年に子どもの指導はいかにすべきか」というコラムを新設し、二回にわたつて記事を掲載した。その第一回(一九二三年一月四日付)に掲載された「少年会と今後の方針」には、「子どもたちをよく指導することによって、未来の社会も完全になる。天道教少年会、方定煥氏談」と記されている。また、一月五日付の「新年に子どもの指導はいかにすべきか(二)」においては、「斥候軍と今後の方針」という副題で、「西洋のボーイスカウトのように、人を助けるのが第一事業、中央基督教会の少年部幹事、鄭聖采氏談」が報じられている。この二つの記事は、当時の「少年運動」の動向を端的に示しているものと考えられる。すなわち、天道教に支えられ全国に広がっていた「少年会」と、基督教青年会によって立ち上がった「少年斥候軍」を主軸として、朝鮮の少年運動は、活発に動いていたのである。『朝鮮日報』に掲載された記事のなかで、まず方定煥の記事から見えていきたい。「少年会と今後の方針」において方定煥は次のように訴えている。

これからは各地の少年団体が盛んに立ち上がってくれるのを信じており、我が同胞が一日でも早く、人間らしく、自由により、幸せに生活するためには、まず子どもたちを善導し、彼らのための事業を経営しなければならない。機関を設備しなければならぬ。⁸⁷⁾

一九二一年五月、「天道教少年会」を創立して以来、各地に少年会を活性化させるために奮闘していた方定煥は、「子どものための事業」、その第一歩として、子どもの雑誌である『オリニ』の創刊にとりかかった。『オリニ』は、創刊号から少年会の機関紙のような役割を果たしていた。創刊号の「皆さん」という欄を見ると、「ソウルにお住まいの方は、校洞普通学校の前、天道教少年会の方にお越し下さい。田舎にお住まいの方は、その田舎にある少年会にお越し下さい。」⁸⁸⁾と、少年会に入会することを奨励、次のような少年会組織に関する具体的な指導まで行なっていた。

まだ少年会が組織されていない田舎にいる皆さんは、きつと寂しいでしょう。その青年会で誰かの力を借りるか、皆さん同士でも必ず少年会を組んで下さい。ソウルの方に通知してさえくたされれば、参考にすべき規則と、その他のものをお送り申し上げます。⁸⁹⁾

また、「各地方の少年会消息」欄も設けられる。そこには、「各地の少年会にお願いします。しきりに手紙を書いて送ってください。」と記されており、各地で創立された少年会を紹介、総会の内容や役員の名簿を発表して、行なった活動を報告している。例えば、第一巻第三号の「各地方の少年会消息」には、次のように報じられている。

天道教安州少年会、本会は一昨年（辛酉）八月に、天道教安州青年会の少年部として設立されたが、その翌年の四月三十日に、天道教安州少年会となりました。日曜日ごとに「日曜講習会」を開き、少年たちに必要で適切な日課を与える一方、運動や歌劇のような活動を時々行なつて、多くの人々から称讃を受けています。現在会員は五十名であり、本会を代表する委員は、安鳳淵、李光直、（中略）等八名です。⁹⁰⁾

このような少年会の運動に刺激されて、一九二二年三月末頃からは、ボーイスカウト組織を準備する活動が始まる。なかでも、基督教青年会の鄭聖采が中心になつて積極的な活動を展開していく。⁹¹⁾一九二二年一〇月五日、八名をもつて創立した「朝鮮少年軍」は、わずか一年間で全国の会員数が一六〇名に達するほど、成長していった。

一九二三年四月三〇日付の『朝鮮日報』には、「少年運動協会創立に對して」と題した、次のような記事が掲載される。

近日に至り、小児の幼稚園と少年の「ボーイスカウト」等が組織されて、幼少の同胞を修養する機関が設けられたがこれは物理的な拘束があるため、その便宜を一般が共享することができないところ、この前に開闢社主筆、金起田氏外某々有志の発起によって朝鮮少年運動協会を組織し、事務所を開闢社内に設置した。来る五月一日を子どもの日と定め、二十万枚の宣伝文を撤布した。演芸会も開かれる予定である。同事務所で会議を開き、全朝鮮各少年会に一致団結を勧誘したところ、此に対して賛成する者が大多数を占めた。これで、全朝鮮少年が今までなかつた大会合大活動の盛儀を參觀することになった。³²

朝鮮における最初の「子どもの日」は、「天道教少年会」が創立一周年を記念して、一九二二年五月一日を「子どもの日」に宣布したことに由来する。その翌年の一九二三年四月には、少年問題をより広く宣伝し、少年問題をより本格的に研究しようという趣旨のもとで、「少年運動協会」が組織される。「少年運動協会」の関連団体には、仏教少年会、朝鮮少年軍、天道教少年会が中心となつた。この会議を通して、毎年五月一日を「子どもの日」に定めることと、来る五月一日に第一回の宣伝を行うことが決定された。第一回の「子どもの日」には、少年問題に関する宣伝紙を二〇万枚印刷して、午後三時に各地に配布し、約二千名の少年を集めて街頭行進を行なう計画が立てられた。

午後七時半からは、子どものための記念少年演芸会と、大人のための少年問題講演会が予定された。

一九二三年五月一日の当日、『東亜日報』は、「今日は子どもの日―子どものための初めての祝福、午後三時に全国で宣伝」という見出しで、次のような記事を出している。

子どもの日——五月一日がやって来た。朝鮮で初めて子どもにも人間としての権利を与えると同時に人間として待遇しようと呼ぶ日がもどってきた。先祖代々、子どもも大人も人間の仮面を被り、人間らしく生きられなかつたのは、我々の骨髓にしみた怨恨である。(中略)これに対して志のある何人かで発起した少年運動協会という組織で、若者や老人はすでに希望がない。我々はひたすら残つた力を振り絞つて、可哀想な我が後世の子どもに希望を与え、生命の道を開いてやろう。という趣旨で今日——五月一日を子どもの日と定め、子どものために力を合わせて仕事をしようと言伝すると同時に、たつた一日のわずかな時間だけでも彼らを喜ばせようというのが、この日だという。朝鮮の子どもたちよ、彼らに幸せあれ。朝鮮の父兄よ、彼らに真心あれ。³³

『東亜日報』によると、二千余名の少年による街頭行進は当局の禁止処分によつて実現できなかつた。午後三時頃に天道教堂で、市内各少年団体と小学生千余名、その他少年運動に関係

ある多数の有志が集まって、祝賀式を挙行した。記念式場では、「少年運動の宣言」として次のような「少年運動の基礎条項」が朗読された。

本少年運動協会は、この子どもの日の最初の記念すべき五月一日である今日において、静かに考え、固く決意したあげく、敢て下記に示した標榜を声高く伝え、これに対する天下の兄弟の注目と共鳴、それから協同実行があることを望むところである。

一、子どもを在来の倫理的圧迫から解放し、彼らに対して完全な人格的礼遇を行なうこと。

二、子どもを在来の経済的圧迫から解放し、満一四歳以下の子どもに対する無償または有償の労働を廃すること。

三、子ども自身が静かに学び、楽しく遊ぶに足る各種の家庭または社会的施設を作らしめること。⁹⁴

この宣言文に対して、尹石重は「世界最初の児童憲章」であることを指摘する⁹⁵。「ジエネバ宣言」と呼ばれる「国際児童権利宣言」が「憲章」として採択されるのが一九二四年のことで、「少年運動の基礎条項」宣言の一年後のことである。また尹石重は、『子どもと共に一生』において、この宣言文が金起田によって作成されたことも明らかにしている。

第一回「子どもの日」の記念会が終わった後、同年七月二三日から二八日まで、「全鮮少年指導者大会」が開催される。

この大会はセクトン会によって企画されたもので、『セクトン会子ども運動史』によると、一九二三年五月二八日に東京の方定煥の部屋（上渋谷二九番地丸山）で行われたセクトン会第四回の会台で決議されたものである。この会台では、会員各自が新聞及び雑誌に論文を発表して、セクトン会の存在と趣旨を一般社会に知らせること、夏休みに全国的な規模の全鮮少年指導者大会を開催することが決議された。セクトン会は、六月九日に、東京の丁炳基の部屋（野方村江古田丸山一五〇〇番地）で第五回の会台をもった後帰国し、天道教堂でオリニ社と共同主催の全鮮少年指導者大会を開催した。大会の参加資格は、地方少年会の代表者、幼稚園及び小学校の先生、そしてセクトン会の会員たちが推薦した人に限られていた。大会当日、一六カ所の団体が参加した。この大会のなかで、セクトン会の主幹で開催されたのは、第一回の「児童問題講演会」と「児童芸術講習会」であった。『セクトン会子ども運動史』では、この二つの集会を「韓国における最初・最大の規模で、セクトン会同志たちはそこで、その当時韓国民族の二世となる国民に、未来のための底力のある指導原理とその実践の技術を提示したのである。」⁹⁶と評価している。

本会の順番と担当は次のとおりである。「司会―丁炳基、童謡理論―秦長燮、童謡実際―尹克栄・鄭順哲、童話―方定煥、童話劇―趙俊基（候補、高漢承）、少年問題について―方定煥、児童教育と少年会―曹在浩」⁹⁷

大会を記念して、『オリニ』第一巻第八号は「全鮮少年指導

者大会記念号」として発刊された。雑誌の巻頭には次のように記されており、雑誌の内容も大会に参加した少年指導者代表の文章によって構成されている。

特別にこの本は、朝鮮の少年運動史を大きく画した、セクトン会とオリニ社主催の全鮮少年指導者大会を記念したものです。大会に集まった指導者の皆様が、素晴らしいお話と歌と講演をもつて、自ら大会参席を記念し、全鮮の友達に送ってくださった素晴らしいお土産です⁸⁸。

全鮮少年指導者大会は、翌年にも行なわれた。一九二四年八月の大会には、全国一四〇カ所の少年会が参加して団結を図った。また、同年には、第二回の「子どもの日」の記念会も盛況に開催される。一九二四年四月二一日にあった「子どもの日」の準備会には、方定煥、金起田、李鐘麟などが中心となって次のような決議事項を定めた。

一、五月一日には、ソウルをはじめ、全国重要地方に一万余のポスターを貼って、全国一三四カ所の少年会員、全員が総動員して、三〇万枚の宣伝紙を各家庭はもちろんのこと、一般通行人たちにまで、一々配布すること。
二、「子どもの日」は、子どもの祝祭日なので、「クリスマス」のように、四日間子どものためのイベントを開くことにする。

第一日（五月一日）には、子ども大会を開催して、歌劇や奏楽などで、夜遅くまで楽しませること。

第二日（五月二日）には、子どもの保護者大会を開催、やはり歌劇などをもって楽しませると同時に、宣伝講演をすること。

第三日（五月三日）には、子どもたちに最も重要であり緊急な、童話と童謡を宣伝する意味で、昼間には童話会、夜には童謡会を開催、また音楽会も開催すること。

第四日（五月四日）には、特に、働いている職業少年慰安会を兼ねて、子どもの野遊会を開催、ブランコ乗りやシルム（日本の相撲に似た競技―筆者注）などの色々な面白い競技を行いながら一日を過ごすようにする⁸⁹。

一九二四年五月一日、午後三時から天道教堂で『オリニ』誌の記念祝賀式が行なわれた。『セクトン会子ども運動史』による当日の様子は下記のとおりである。

解放を叫ぶ子ども千余名と、子どもの解放を切実に願う有志たちが集まって、方定煥氏の熱烈な演説のなか、各自の名前と住所を書いたゴム風船を一斉に空に放ち、一番遠くまで飛ばした人には賞を与えた。夕方には、市内各所に宣伝ビラを一斉に配布した。そして、東亜婦人商会などのソウル市内に居住する朝鮮人が経営する商店では、大会期間中に子どもの商品を特別に割引奉仕することにした。

また当日には、「子どもの日」を慶祝する義援金もたくさん集まった。¹⁰⁰ 記念会の二日目は、予定どおり天道教堂で「母の大会」が開催される。第二回の「子どもの日」の記念会は、少年団体の連合に加え、地域住民による協力にも支えられ、さらに盛大に、四日間わたって行なわれた。記念会は、音楽・演劇・舞踊・講演などで構成された。そこには、子どもたちにも重要であり緊急な問題として「童話と童謡の普及」を急いでいたセクトン会の趣旨が反映されている。

方定煥は、『オリニ』を創刊する二年前から、『天道教月報』を通して「童話主義」を唱え、次のように述べていた。

弟をもつ兄よ、子どもをもつ親よ、子どもを教える先生よ。願うところ、かわいい幼い詩人に、お金をあげないで、お菓子をあげないで、暇があるたびに、機会があるたびに、神聖な童話を聞かせて下さい。(中略) ああ、敬愛する我が幼い友よ！地球の花である子どもたち、彼らのために私が生むこのささやかな芸術が、世の中多くの大人の鞭撻を受けることを願い、それによって、さらに価値のある童話芸術が生まれてくるのを願う。¹⁰¹

『オリニ』においても、その創刊号から「童話はもちろんのこと、その他すべてのものを、読みしだいお爺さんやお婆さん、

お母さん、お姉さん、弟、隣の友達にも聞かせて下さい。この本を読んでいない人にも、よいものはよく聞かせてあげることです。」¹⁰² と、語り続けていた。

セクトン会が第一番目に掲げた趣旨は、「童話及び童謡を中心にして一般児童問題まで行なうこと」であった。すなわち、児童文学を通して児童運動の展開を目指していたのである。この趣旨によって、「天道教少年会」を中心とした全国の少年会では、童話会・童謡会・歌劇会などが活発に開かれるようになる。そのような児童運動の指針書となつたのが『オリニ』であり、また、児童運動の最先端で活躍していたのが、方定煥を含むセクトン会、つまり、天道教幹部であった。

初めて「児童解放論」が主唱されたのも、初めて「児童問題」や「児童運動」が本格的に論じられたのも、『開闢』を通してであった。そこから「児童」に対する関心が高まり、児童運動の実践として、「天道教青年会」から「天道教少年会」が分離されたように、開闢社から『オリニ』が創刊された。セクトン会会員たちは、『オリニ』に児童文芸物を発表する一方、新聞や雑誌に論文を発表して、少年運動を一般社会に知らせる役目を果たしていた。また、児童問題に関する講演会も頻繁に開催し、講演では「童話と童謡を宣伝する意味」で口演童話を行なっていた。

児童（解放）を主張した少年運動の動きによって「子どもの日」が記念され、『オリニ』が創刊される一九二三年頃からは、朝鮮児童文学は定着期に入っていく。朝鮮児童文学の成立には、

崔南善や方定煥の個人的な意欲のあり方とともに、それを成熟させていった朝鮮内部の社会的な気運が内在していた。当時朝鮮の「児童文学」を誕生させた一連の社会的な動きが、日本帝国の支配下で行なわれた以上、朝鮮が日本の一部であったという歴史的背景が問題となる。この問題は、日本との関連性に対する考察が余儀なくされることを意味するものでもある。朝鮮人留学生による日本児童文学の学習、受容に関する検証とともに、日本人の活動による影響についても検証しなければならぬ。

次回において、朝鮮児童文学の成立過程における日本の動向を「巖谷小波」を通して論じていきたい。巖谷小波は、崔南善による「児童文芸物」が出版されていた一九一三年に初めて朝鮮に渡り、口演童話を行なった。そして、一九二三年、朝鮮では「児童」に対する関心の高まりが「少年会」を全国的に拡散させ、『オリニ』誌を含む数多くの児童雑誌が続出するに至るなど、児童文学の基盤が整い始めた。このような一九二三年の六月、巖谷小波は再び朝鮮半島に招かれていた。この招聘と朝鮮児童文学の定着はどのように関連してくるのであろうか。

1 尹鼓鐘「児童雑誌小史」『児童文学』（培英社、一九六二年一月）、五四頁。（筆者訳）

2 尹鼓鐘、前掲書、五五頁。（筆者訳）

3 趙豊衍『逸咄（松明）』（少年韓国日報、一九六九年二月）、四三頁。（筆者訳）

4 趙豊衍、前掲書、五〇頁。（筆者訳）

5 趙豊衍、前掲書、同頁。（筆者訳）

6 李在徹「韓日児童文学の比較研究（一）」『韓国児童文学研究』（韓国児童文学学会、一九九〇年七月）、八頁。（筆者訳）

7 李在徹、前掲書、一〇頁。（筆者訳）

8 李在徹、前掲書、一五頁。（筆者訳）

9 李在徹、前掲書、二〇頁。（筆者訳）

10 李在徹『韓国児童文学研究』（韓国児童文学学会、一九九〇年七月）一五頁。（筆者訳）

11 方定煥の日本留学に対しては、仲村修の研究「方定煥研究序説―東京時代を中心に」と李相琴の研究「方定煥と『オリニ』誌―オリニ誌刊行の背景―」がある。

12 例えば、「子どもの成長段階に従う知識の適切な按配は、小波が日本で勉強した児童心理学とも関係があるだろう。」（三九頁）「小波の自由画大会は、彼が日本にいた時、当時鈴木三重吉、北原白秋、山本鼎などによって提唱された日本の芸術教育運動に影響されたとみられる。」（六五頁）「小波は一九二〇年頃東京の東洋大学の哲学科に籍を置いて児童文学と児童心理学を研究したが、この時期に少年運動の方策を具体化させた。」（二二頁）などのところは、詳細に検討されていない。

- 26 李在徹は、『少年』誌の内容構成について、教訓的なものが一五%、伝記と逸話類が二二%、學術論文類(歴史・地理・自然科学)一二%、小説一〇%、詩一五%、隨筆類三%、其他三三%と把握している。『韓國現代児童文学史』(一志社、一九七八年一月)、四七頁参照。
- 27 『少年』第一年第一巻(通巻一巻)‘新文館(一九〇八年一月)
- 28 우리 大韓으로 하이공 少年의 나라로 하라 그리하라 하면 能히 이 責任을 擔當하도록 그를 教導하여라 (編輯記)
- 29 泰在該『日本による朝鮮文壇の四〇年』(朝日新聞社刊、二〇〇一年七月)、五三頁。
- 30 「꼭 五十年前을 回想하면서 그는 그때의 實情을 自己도 印證하게 하는 듯이 筆者에게 말하기를(略) 日本서 暫間있을때 모니까 日本엔 兒童을 相對로하는 雜誌가 數種있어서 그것을 單單다고 할까해서 始作은 했는데 日本과는 處地가 달라서 兒童을 相對로 아가자기 재미있는 興味 誌事는 別로못놓고 單單에 가서는 오히려 이름『소년』과는 反對로 成人을 相對로 하는 一般啓蒙雜誌가 되고 말았는데 이것은 當時 實情으로 示할수없는 일이었요」(崔一植『知識探索』(日新社、一九五九年)二二頁。(編輯記))
- 31 「本誌는 이대까지던디 우리少年에게 剛健하고 堅確하고 窮通한 人物이기를 바라던 故로 漢로 軟弱 纏綿한 處飾의 마음을 刺戟할듯한 文字는 조금도 내어디아니할터이오 그러나 美的思想과 心神 謙遜에 有助할 것이면 輕軟한 것이라도 조금도 攄載하게소 輕軟한 것을 主張하여 兒童의 好學心과 敬慕를 誘인 하고 온갖 纏綿과 卑遜을 다 하여 坦蕩 爽然 心에 暢達과 纏綿心을 攄케한것은 女國體譜의 撰者라 이것은 우리 同人이 外國에 있을때에 堅히 悵嘆하되나 바인故로 獎勵上에

- 不得不爲 한것外에는 一切 纏綿을 內디할터이오」『少年』第一卷一號(新文館、一九〇八年一月)、八二頁。(筆者記)
- 32 『少年』第一卷一號(新文館、一九〇八年一月)、八二頁。(筆者記)
- 33 (其一) 同譯아, 同譯아, 나무가세, 배를하 못가게네, 무슨배? 자라배! 무슨자라? 언가라! 무슨엄? 순안! 무슨순? 靑순! (後略) 『少年』第二年第三卷(新文館、一九〇九年三月)、五四頁。(筆者記)
- 34 單아달아, 밝은달아, 李太白이, 밝던달아, 자라자라, 자달순애, 桂樹나무, 兩親父母, 모사다가, 千年萬年, 살고지고, 『少年』第二年第四卷(新文館、一九〇九年四月)、六二頁。(筆者記)
- 35 崔南善「韓國文壇의 草創期를 語호」『現代文學』(現代文學、一九五五年一月)、三二頁。(筆者記)
- 36 李光洙「我が告白」(趙容萬의 前掲書參照。(略) 訳は筆者によゞ)
- 37 『少年』通卷一八號(新文館、一九一〇年六月一五日)(筆者記)
- 38 『赤く上着』誌が手に入らなかつたためかその創刊年度のごつては少しずつれがある。『韓國新聞・雜誌總目錄』(国会圖書館、一九六六年)には、一九一一年一月創刊で一九一三年五月終刊と、趙容萬の『六堂崔南善』には、一九一二年七月創刊で一九一三年六月終刊となっている。洪一植は一九一二年七月創刊と推測している。しかし、李在徹が『赤く上着』一卷二號をみるまで、一九一三年一月に創刊された一九一三年七月に廢刊されたことが分る。と推測しているのでも、つれに違ひない。
- 39 『붉은겨고리』는 우리 兒童教育에 適當한 補助機關이 無함을 慨하여 新文館으로서發行하다가 第拾貳號에 至하여 攄송으로 停廢된 것이니 우리 兒童文學의 先驅로 趣味와 實益의 無盡藏이라 하여 歡呼의 聲이 江湖에

二五頁。(筆者訳)

62 「新聞紙法」とは、一九〇七年七月二四日に李完用内閣が法律第一号に公布したもので、新聞・雑誌などの定期刊行物に対する行政的規制と刑事的製材を規定した韓国最初の言論関係法律である。法律の内容は、日本の「新聞紙條例」を模倣したもので、定期刊行物の発行を許可制と保証金制で抑制し、許可された定期刊行物に対しても発売・配布禁止、発行停止(停刊)、発行禁止(廃刊)などの規制を加えることが出来た。

63 「刊行物に関する取締は新聞其の他定期刊行物に関する取締と、一般出版物に関する取締とを区別しなければならぬ。」明治四十年七月韓国政府は新聞紙法を發布し、新聞紙を発行するものは観察使又は警視總監を経て内部大臣の許可を受けしめ、公安風俗を害する記事を掲げるものは其の発充分布を禁止し之を押収し、又は発行の停止若くは禁止を命ずることとした。」「一般出版物に対しては明治四十二年二月韓国法律第六号出版法があり、許可主義を採つて朝鮮人及び外国人に適用され、内地人に対しては明治四十三年五月発布の統監府令出版規則があり、内地出版法(明治四十六年四月法律第十五号)及び予約出版法(明治四十三年四月法律第五十五号)を引用し屈出主義を採つて居た。併合後に於ては刊行物に関する諸法規は従前の儘之を襲用施行し、検閲を厳にしたが已むを得ず発行の停止又は禁止を命じたことも二、三に止まらず、司法処分に附したものとさへあつた。」朝鮮総督府、前掲書『増補朝鮮総督府三十年史』、三六頁。

64 「長幼有序의 根本意 一 卽五倫을 敎育한 當初其의 意圖를 詳히 보면, 大體禮儀作法上長幼의 順序를 詳히 說明하고 長者가 幼者의 人格을 無視하기까지 位序를 詳히 說明하고 幼者의 人格을 尊重하는 것이다. (略) 要約하면 第一幼年도 亦是 人이다. 二千萬兄弟中의 一人이며 人인 世界十六億

萬人中의 一人이며 將來의 큰 運命을 開拓한 幼童의 一人이라 하여 그의 人格을 認할 것이외다. 그리하여 그로 더불어 아무 잘못 際會하여 長幼間に 墜하는 甚한 害를 受도록 할 것이외다. 이러한 精神을 長者인 우리가 守히 所有하면 長幼有序의 未弊로 越한 現下의 諸般惡習을 改하게 될 것이며 牛馬의 數百萬 어린男女는 仍舊의 未善을 改함으로서 解放될 것이외다. 近日女子解放論이 盛行함에 不拘하고 兒童解放論이 何 處까지 流行하지 못하오나 우리가 金小春「長幼有序의 未弊(幼年男女의 解放를 提唱す)」『開闢』第二号(開闢社、一九二〇年七月)、五四頁。(筆者訳)

65 一記者「장다...가다...」『開闢』第四号(開闢社、一九二二年八月)、八三頁。(筆者訳)

66 「當局의 建議한 것으로써 滿足하지 않고 한가름 나아가 一般社會에 이렇 徹底히 宣傳하며 먼저 部員된 各자가 各자의 家庭兒童間에 있어서 이 實行하게 한다」『우리인의 精神運動』『開闢』第十六号(開闢社、一九二二年一〇月)、五九頁。(筆者訳)

67 『開闢』第一八号(一九二二年二月一日)、三六頁。(略と翻訳は筆者によぞ。)

68 『開闢』第二〇号(一九二二年二月八日)、六二頁。(筆者訳)

69 『オリニ』創刊号(開闢社、一九二三年三月)(筆者訳)

70 『開闢』第一六号(開闢社、一九二二年一〇月)、六二頁。(筆者訳)

71 仲村修「朝鮮初期少年運動(一九一九〜一九二五)」と兒童文學(日韓文化交流基金『訪韓學術研究者論文集』第二卷、二〇〇二年五月)

72 『開闢』第二二号(一九二二年三月一日)、三八頁。

73 鄭寅燮『벵크톤會子도運動史』(學園社、一九七五年五月)、五六頁。(筆者訳)

